

生徒のニーズ別キャリア教育の 展開方法の差異に関する考察

辰巳 哲子 リクルートワークス研究所・主任研究員

本稿では、22年度学習指導要領の改訂により、キャリア教育が義務化される高等学校について、生徒の実像によるキャリア教育の目的と進め方の差異を検討した。その結果、他校に比して下位校で、より基礎的な社会性の向上が目的とされ、進め方については、上位校で「興味・関心」と「進路決定」が分離された状態でキャリア教育が展開されていること、下位校では、進路指導と生徒指導を融合した展開が見られることが明らかになった。

キーワード： キャリア教育, 高校, 普通科

目次

- I. 問題意識の背景
- II. 本稿の位置づけと研究課題
- III. 調査概要
- IV. 分析結果
 - IV-1. 高校ランク別進路指導活動の差異
 - IV-2. 高校ランク別キャリア教育の目的と進め方に関する差異
 - IV-3. 推進事例に見られる、進路指導とキャリア教育の進め方との関係
- V. 考察

I. 問題意識の背景

平成18年に改正された教育基本法において、教育の目標の一つとして、「自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」が規定された。これを受けて、平成20年1月の中教審答申では、社会環境の変化を背景として、将来子ども達が直面するであろう様々な課題に柔軟に対応し、社会人・職業人として自立していくためにキャリア教育を充実させる必要があることを指摘している。同年7月に閣議決定された教育振興基本計画においても、「特に重点的に取り組むべき事項」として

「キャリア教育・職業教育の推進」が挙げられた。さらに、これら一連の流れを受けて、平成20年12月に文部科学大臣から、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」諮問が出され、平成21年9月現在、中央教育審議会において、社会人・職業人として自立した人材の育成、学校から社会・職業への円滑な移行策としてのキャリア教育の在り方について、検討が進んでいる。

これらの議論を受けて改訂された、高等学校の学習指導要領の総則において、「教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」として、「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」が明記され、平成21年度より新学習指導要領に沿った高等学校のキャリア教育が始まろうとしている。このような状況下において、各高校のキャリア教育の展開方法についてその着手の実態を明らかにすることは、今後、キャリア教育に取り組むはずの各校にとって、重要な意味があるだろう。

これまでの進路指導が、「主体的に進路を選択する」ことに主眼が置かれていなかったこと、「計画的、組織的」でなかったことについては、これま

でも数多くの指摘がなされてきている。例えば尾嶋（2001）は、これまでの進路選択過程は主として生徒の学力水準に依存しており、高校の垂直的序列に起因するトラッキングが続いてきたと指摘している。

しかし、総則にもあるように、キャリア教育が「計画的、組織的な進路指導」を通じて推進されるべきであるなら、既存の進路指導は、今後展開されるであろうキャリア教育と統合されるべきものである。そして、キャリア教育において再三指摘されている、「生徒の発達段階を重視する」という側面からも、個別の生徒の課題やニーズに沿う視点が必要である。それでは、各高校はどのように生徒の実態に応じて、これまでの進路指導を再構築・統合しつつ、キャリア教育を推進してゆけばよいのか、本研究では、こうした問題への接近を試みたいと思う。

既存の進路指導の再構築の方法を検討するにあたっては、まず、これまでの進路指導が目指してきたものを確認しておく必要があるだろう。総則で示された、「自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択する」ということ背景として、1984～1987年度の臨教審答申が大きな影響を与えている。臨教審答申では、これまでの一元的な学力に基づく選抜に重きをおいた進路形成を「偏差値偏重」と批判した上で、生徒の「興味・関心」に基づく進路形成に変革しようとしてきた。14期中央教育審議会では「多角的な発想から思い切って多様化・弾力化を図る必要がある」とされ、高等学校における個性化・多様化政策が押し進められてきている。しかし、これらの個性化・多様化政策は各学校もしくは各学級のやり方にゆだねられてきたところが大きく、この個性化・多様化政策を反映しながら、各校で何をねらいとして、どのようにキャリア教育の推進施策が進められているのかについては検討されてきていない。この点においても、本稿において、各校が既存の進路指導活動を、生徒の課題やニーズに応じたキャリア教育へどのように再構築しようとしているのか、明らかにすることの意義は高いように思われる。

II. 本稿の位置づけと研究課題

生徒の課題やニーズに対する進路形成手法の実態については、学校ランクと進路形成の関係として、これまでもさまざまなアプローチをとってなされてきている。70年代～80年代にかけてはトラッキングのメカニズムに関する大量の研究が蓄積された。この時期には、入学する学校によって、その後の進路選択の機会と範囲が限定されてしまうことのメカニズムを明らかにしようとする試みがおこなわれてきた。耳塚・岩木（1983）は高校を4つのランクに分け、達成できる進路の違いを実証的に描いている。藤田（1980）は、「普通科か職業科かによって、あるいはまた、進学校かそうでないかによって、上級学校に進学するかどうかにより著しい差異が見られる」と言明し、さらにこうした達成進路の違いが起こる背景としては、生徒文化や教授方法の違いから解明しようとする研究が多く蓄積されている（耳塚1980、木原1983など）。これらの大量の研究の要素を包括したものとして、菊地（1986）は、個人が社会化されるありように着目し、入学前効果として①チャーターを、入学後効果としては、②差別的教授仮説、③差別的友人仮説、④差別的烙印仮説の3つをあげている。このうち、学校での進路指導カリキュラムを含む、差別的教授仮説とは、入学してくる生徒の学力が各校で異なっているため、結果として履修内容そのものに差が生じることであり、そうした教授＝学習過程が日常化することによって、生徒の学力や進学意欲の分化を促すというものである。それでは、荒牧（2003）が「序列的階層性」と指摘した80年代にかけての進路形成は、1990年代以降の多様化を目指した教授過程にどのように引き継がれ、影響しているのか、まずはこの点を確認しておこう。

荒川（2009）は、1984～1987年度の臨教審以降本格化した、第三の教育改革以降の進路指導を挙げ、個性化・多様化政策がおしすすめられてきた高校において、学校ランクに応じて、進路指導が異なる動きを見せていることに着目している。

そして、個性化・多様化政策においては、①進路指導の多様化がもっぱら中位・下位校で進行していること②上位校と中位・下位校が、アカデミックな教育を行うセクターと、興味・関心のままに学習させるセクターとに分化する傾向があることをカリキュラム分類や観察、卒業後の進路状況などを通じて論証している。しかし、この進路指導を統合しながら進めてゆくべきキャリア教育の導入が、この個性化・多様化政策に対してどのように寄与されようとしているのかは定かではない。つまり、生徒ニーズの違いを前提に、キャリア教育のねらいをどのように捉え、どのように展開しようとしているのか。そして、キャリア教育は「多様な進路形成」に貢献し得るのか、という点については検討されていない。そこで本稿では、進学率の違いを、各校における生徒の課題やニーズの違いとして捉え、高校の進学率別にキャリア教育への展開状況を探索していく。個性化・多様化政策後に、進学率ごとの進路指導内容に大きな差異が生じていることを鑑みると、進路指導からキャリア教育の「内容」の変化や進路指導の統合に至る過程である「展開方法」もまた、進学率に応じて異なる動きを見せる可能性があるのではないかとこの仮説が成り立つのである。

これらの仮説を元に本稿の研究課題を次のように設定する。1) キャリア教育のねらい・内容の設定は、生徒の課題やニーズに応じて異なっているのか、2) さらに、その展開方法は、生徒の課題やニーズに応じて異なる動きを見せているのかという点について、各校の進路指導主事が考えるキャリア教育のねらいと実際に行われている推進活動について進学率における差異を探索的に検討する。さらに、定量分析の結果をもとに、キャリア教育の実際的な内容構築とその展開方法について、定性分析によって、その差異をこちら進学率別に検討する。検討にあたり、内容面については、各校において設定された目標と3カ年の実践内容を、「展開方法」については、各校の推進組織と実施に関与する教員集団との関係に着目する。ここでは進学率の異なる3校へのインタビュー結

果から、進路形成における内容面の変化、展開方法といった2つの側面において、学校は既存の進路指導をどのように生徒の課題やニーズを重視したキャリア教育へ統合・変革しようとしているのかを明らかにしていく。

III. 調査概要

課題解決の具体的な手順は以下のとおりである。本稿もこれ以降この手順に沿って展開する。

第1に、実施されている進路指導活動について、進学率別に実施されている活動の違いを分析する(第I節)。進路指導のあり方が進学率によって異なることは、先行研究が示してきた大きな知見である。この知見を踏まえて、まず、実態の基本型をおさえておくことにしたい。その上で、生徒の課題やニーズは進学率によって異なるという前提のもと、視野を広げて、「キャリア教育のねらい」「実施しているキャリア教育推進活動」について、「進学率」との関係性を分析する(第II節)。以上によって、生徒の課題やニーズごとに考えられているキャリア教育と、どのような推進活動が実施されているのかを確認した上で、第3に、生徒の課題の異なる3校のキャリア教育の推進方法について、これまでの進路指導の再構築の有り様を示し(第III節)、既存の進路指導を活かしたキャリア教育の進め方を検討するための視点を提示する(第V章)。

I, II節の分析には、2008年に実施した「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」の結果を用いる。この調査は隔年で全国の高校における進路指導の実態を明らかにすることを目的として行われており、調査対象は、全国の全日制高等学校(公立・私立)の進路指導主事である。調査期間は2008年10月16日から同年10月22日で、計画サンプル数は5085、回収は948であり回収率は18.6%、有効回答数は910で有効回答率は17.9%である。本研究で対象とするのは、このうち普通科高校における進路指導主事のサンプルである。限定後のサンプル数は、665である。さら

に、進学率70%以上、40%以上～70%未満、40%以下の3つに分類した。本稿で用いる質問内容は大別して、(1)キャリア教育の目的(23項目について「そう思う」から「そう思わない」までの5段階からの選択)(2)キャリア教育の推進に関連して校内で進められている活動(目標・計画・実施・評価・組織体制など)(3)現在実施している進路指導活動(58項目からの選択)である。(1)のキャリア教育の目的は、必ずしもキャリア教育の定義を的確に反映しているとは限らないが、ここでは操作的に定義した範囲内での分析を試みたいと思う。(3)の進路指導活動については、分析可能な回答数が得られたものを分析対象とし、その結果項目数は、21項目とした。

さらに、第2の課題を検討するために、キャリア教育への実際的な展開方法に関する独自の調査を各学校において実施した。調査方法は、キャリア教育の内容と推進組織に関する観点を事前に示した上での半構造化インタビューである。インタビューでは、1)「目的・内容」については、各校において設定された目標と3カ年の実践内容、評価およびその結果を、2)「展開方法」については、各校の推進組織と実施に関与する教員集団との関係に着目した。その上で、進学率ごとにこれまでの進路指導活動をどのように再構築し、キャリア教育としての展開を進めてきているのかを確認した。調査対象としたのは、①調査時点で、進路指導からキャリア教育への展開をはかっている過渡期にある公立の高等学校 ②各校の進学率が異なる学校であることを前提とし、さらに、行政の対応についての変数を除去するため、同一行政区において実施することとした。具体的には、山間部にあるキャリア教育推進指定地域3校である。3校は平成19年度から、文部科学省の指定を受け、キャリア教育への取り組みを進めてきた学校である。3校のプロフィールは以下のとおりである。

	上位校	中位校	下位校
生徒数	690	582	348
進学率	82%	57%	33%

調査対象の学校で、実際に回答してくれたのは、校長・教務主任・進路指導主事・各学年主任およびキャリア教育担当教員である。質問内容は大別して、(1)キャリア教育の目的と内容について(目標・活動内容の計画と実施および評価方法・学年間の連続性)(2)キャリア教育の進め方について(組織体制・分掌間の分業・情報共有のあり方・校種間連携・地域の事業所など教育資源との連携)である。実施時期は、2009年6月である。

IV. 分析結果

IV-1. 進学率別進路指導活動の差異

最初に、どのような進路指導がおこなわれているのか、進学率ごとに確認しておく。実際におこなわれている進路指導活動について、学校を上位校・中位校・下位校に分類し、各グループの差を確認したところ図表1のような結果となった。

図表1 進学率別進路指導活動

	上位校 N=327	中位校 N=182	下位校 N=156	有意水準
進路ガイダンス	95.4%	96.2%	96.8%	
文理(コース)選択ガイダンス	91.7%	79.1%	50.0% ***	
進路の手引きの作成	81.3%	78.6%	69.2% *	
進路ニュースの発行	59.9%	56.6%	56.4%	
進路相談・キャリアカウンセリング	74.0%	70.9%	69.2%	
適性検査	58.7%	63.7%	76.9% ***	
補習・課外授業	92.0%	90.7%	84.6% *	
資格取得・検定奨励	43.1%	74.7%	83.3% ***	
進学面接指導	93.9%	96.2%	94.2%	
就職面接指導	50.2%	92.3%	94.2% ***	
小論文指導	91.4%	93.4%	89.1%	
情報誌など活字情報による進路研究	67.9%	62.1%	50.0% ***	
高等連携：専門学校講師による模擬授業	10.7%	27.5%	37.2% ***	
職業人によるインタビュー	16.5%	17.6%	20.5%	
就業体験(インターシップ)	22.0%	50.5%	78.8% ***	
職場見学	24.5%	54.4%	75.6% ***	
ハローワークとの連携	33.9%	68.7%	83.3% ***	
起業家教育	1.5%	1.1%	5.8% **	
進路・将来の職業を意識した教科学習	17.7%	12.1%	18.6%	
総合的な学習の時間の利用	71.6%	75.3%	80.8%	
特別活動(HR活動)における進路学習	76.8%	74.2%	67.9%	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

この結果からは、進学率によらない、共通した進路指導活動が確認された一方で、進学率に応じて実施されている活動が存在することが明らかになった。カイ二乗検定の結果、5%以下の水準で有意差が認められ、上位校でより多く実施されているのが、「文理(コース)選択ガイダンス」および「情報誌など活字情報による進路研究」である。

一方、同様の検定の結果、下位校では、「適性検査」「資格取得・検定奨励」「就職面接指導」「就業体験（インターンシップ）」「職場見学」「ハローワークとの連携」「専門学校講師による模擬授業」である。各校における進路指導活動の決定要因そのものについては、定かではないが、上位校において、「アカデミックな」教育を想起させる活動の実施率が高く、下位校においては、直後の就職を早期させる活動の実施率が高いことは、荒川（2009）が指摘している、学校ランクによる進路指導の二極化を支持するものである。さらに、ここで着目したいのは、「中位校・下位校における多様化」が進んでいるかという点であるが、より多くの項目において、下位校において実施率がまさっている状態であることから、本分析の結果からは、やはり上位校に比べ、下位校において、進路形成に際し、より多様な手段が用いられていると考えるのが妥当であろう。

IV-2. 進学率別キャリア教育の目的と進め方に関する差異

①キャリア教育の目的

それでは、21年度から新学習指導要領に加えられたキャリア教育について、そのねらいは生徒の実態にあわせ、異なった目的を持ったものとして認識されているのだろうか。

図表2は、各校の進路指導主事が考えるキャリア教育の目的を学校間で確認したものである。カイ二乗検定の結果、P値が.001以下の水準で有意差が認められ、下位校でより多く目的として認識されているのは、「社会性（規範意識、思いやり、マナーなど）を身につける教育」であり、同様に、1%以下の水準で有意傾向が見られたのは、いずれもより多くの下位校において、「職業や産業の動向について理解するための教育」「多様な他者とコミュニケーションする力を身につける教育」「将来つきたいと思う職業をみつける教育」である。

この結果から示唆されるのは、キャリア教育のねらい・目的そのものが、生徒のニーズや課題に

応じて、多様に認識されているという点である。これはキャリア教育が目指す、生徒の状況に応じたキャリア教育を各教員が志向している傾向が窺える結果である。特に、下位校においては、上位校・中位校と比べ、より基礎的な社会性の向上にそのねらいをおいていることが明らかになった。

図表2 進学率別キャリア教育の目的

		上位校 N=327	中位校 N=182	下位校 N=156	有意 水準
意欲	学ぶ意欲高める教育				
	そう思う	88.6%	84.4%	82.6%	
	どちらともいえない そう思わない	6.7% 4.8%	10.6% 5.0%	12.9% 4.5%	
働く意欲を高める教育	そう思う	85.4%	84.4%	94.2%	
	どちらともいえない そう思わない	11.1% 3.5%	12.8% 2.8%	3.8% 1.9%	*
	自己理解				
現在の自分の能力や適性を認識する教育	そう思う	87.0%	88.8%	93.5%	
	どちらともいえない そう思わない	8.6% 4.4%	9.5% 1.7%	5.8% 0.6%	
	自分の好きなことや志向性を認識する教育	そう思う	81.4%	83.9%	81.8%
どちらともいえない そう思わない		13.6% 5.0%	13.3% 2.8%	12.3% 5.8%	
自己肯定感を向上させる教育		そう思う	73.1%	70.6%	69.7%
	どちらともいえない そう思わない	19.6% 7.3%	25.6% 3.9%	24.5% 5.8%	
	職業理解	職業や産業の動向について理解するための教育			
そう思う		75.6%	86.1%	87.8%	
どちらともいえない そう思わない		17.1% 7.3%	10.0% 3.9%	9.0% 3.2%	**
基礎力	社会性（規範意識、思いやり、マナーなど）を身につける教育				
	そう思う	65.8%	78.8%	87.1%	
	どちらともいえない そう思わない	25.3% 8.9%	16.2% 5.0%	10.3% 2.6%	***
多様な他者とコミュニケーションする力を身につける教育	そう思う	68.9%	77.1%	85.8%	
	どちらともいえない そう思わない	25.1% 6.0%	16.8% 6.1%	11.6% 2.6%	**
	自ら意思決定する力を身につける教育	そう思う	79.5%	81.5%	89.0%
どちらともいえない そう思わない		16.1% 4.4%	16.9% 1.7%	9.0% 1.9%	
課題を発見して解決する力を身につける教育		そう思う	68.9%	71.9%	82.6%
	どちらともいえない そう思わない	24.2% 6.9%	23.6% 4.5%	15.5% 1.9%	*
	キャリア プランニング	将来のなりたて姿・希望する生き方を描かせる教育			
そう思う		93.7%	91.6%	92.9%	
どちらともいえない そう思わない		5.4% 0.9%	7.8% 0.6%	7.1% 0.6%	
将来の目標を設定させる教育	そう思う	92.4%	91.1%	93.6%	
	どちらともいえない そう思わない	5.7% 1.9%	6.7% 2.2%	5.8% 0.6%	
	将来の目標に向けて計画立案する力をつける教育	そう思う	84.5%	86.0%	94.8%
どちらともいえない そう思わない		11.7% 3.8%	11.2% 2.8%	5.2% 2.8%	*
将来つきたいと思う職業を見つめる教育		そう思う	80.8%	85.5%	92.9%
	どちらともいえない そう思わない	14.8% 4.4%	12.3% 2.2%	6.4% 0.6%	**

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

さらに、同様の内容を項目間で比較したところ、図表3のように、上位・中位・下位校に共通して一番高く考えられている目的は、「将来のなりたて姿・希望する生き方を描かせる教育」であり、こうした目的が、カリキュラムという「手段」と結びついたときには、上位校においても、今後「アカデミックな」活動の領域を超えた進路形成の手段の登場が期待できる結果となった。

図表3 キャリア教育の目的

		上位校 N=327	中位校 N=182	下位校 N=156
意欲	学ぶ意欲高める教育	88.6%	84.4%	82.6%
	働く意欲を高める教育	85.4%	84.4%	94.2%
自己理解	現在の自分の能力や適性を認識する教育	87.0%	88.8%	93.5%
	自分の好きなことや志向性を認識する教育	81.4%	83.9%	81.8%
	自己肯定感を向上させる教育	73.1%	70.6%	69.7%
職業理解	職業や産業の動向について理解するための教育	75.6%	86.1%	87.8%
基礎力	社会性（規範意識、思いやり、マナーなど）を身につける教育	65.8%	78.8%	87.1%
	多様な他者とコミュニケーションする力を身につける教育	68.9%	77.1%	85.8%
	自ら意思決定する力を身につける教育	79.5%	81.5%	89.0%
	課題を発見して解決する力を身につける教育	68.9%	71.9%	82.6%
キャリア	将来のなりたい姿・希望する生き方を描かせる教育	93.7%	91.6%	92.9%
	将来の目標を設定させる教育	92.4%	91.1%	93.6%
	将来の目標に向けて計画立案する力をつける教育	84.5%	86.0%	94.8%
	将来つきたいと思う職業を見つける教育	80.8%	85.5%	92.9%

※各項目において、「そう思う」回答した%

②キャリア教育の進め方

図表4 キャリア教育の進め方

それでは、現状において、キャリア教育はどのように進められているのか。以下図表4は、キャリア教育の進め方について、進学率ごとに実施率の差を見たものである。ここでは、項目別の推進状況について進学率ごとの差異を確認する。進学率ごとに実施率が高い項目を確認する理由は、実施率の高いものこそが、キャリア教育の推進にあたって、優先的に着手されている項目であると判断したためである。

その結果、上位校で実施が進んでいる上位3項目は、「キャリア教育の意味を生徒に伝えている(28.1%)」「キャリア教育について組織的な指導計画を作成(26.6%)」、「学校全体の目標として育てる生徒像を作成(26.0%)」である。中位校では、「キャリア教育の意味を生徒に伝えている(34.6%)」「生徒の実態や要望の情報収集を実施している(30.8%)」「キャリア教育について組織的な指導計画を作成(28.6%)」である。さらに下位校の上位3項目は、「学校全体の目標として育てる生徒像を設定(35.9%)」「キャリア教育の意味を生徒に伝えている(35.3%)」「キャリア教育について組織的な指導計画を作成(35.3%)」「学校と地域や民間企業との連携を強めている(35.3%)」である。

	上位校 N=327	中位校 N=182	下位校 N=156
生徒の実態や要望の情報収集を実施している	23.2%	30.8%	33.3%
キャリア教育について自校独自の定義づけ	13.5%	12.1%	16.7%
キャリア教育の意味を生徒に伝えている	28.1%	34.6%	35.3%
学校全体の目標として育てる生徒像を設定	26.0%	24.7%	35.9%
学年ごとの目標として育てる生徒像を設定	19.6%	18.1%	26.3%
キャリア教育について組織的な指導計画を作成	26.6%	28.6%	35.3%
キャリア教育について新学習プログラムを作成	7.6%	11.0%	11.5%
キャリア教育に関する資料を教員に配布	10.1%	13.7%	17.9%
自校独自の資料・テキストを教員に配布	8.3%	10.4%	10.9%
学校と地域や民間企業との連携を強めている	13.5%	24.2%	35.3%
小学校、中学校、大学との連携を強めている	22.0%	22.5%	20.5%
教育のため進路指導担当部署と教科の連携	13.5%	10.4%	17.3%
キャリア教育の概要に関する研修を実施	8.6%	18.1%	19.9%
キャリアカウンセリングに関する研修を実施	3.1%	9.3%	14.1%
キャリア教育の授業実践に関する研修を実施	3.1%	4.9%	5.8%
産業構造の動向を共有する研修を実施	0.6%	3.8%	5.1%
キャリア教育推進のための組織変更を行っている	4.3%	7.7%	5.1%
キャリア教育のため進路指導担当部署名称変更	1.8%	2.7%	1.9%
キャリア教育のため進路指導担当の職務名変更	0.9%	1.1%	1.9%
キャリア教育の成果を教員自身が評価している	7.6%	11.0%	14.1%
キャリア教育の成果について評価を求めている	8.3%	8.8%	12.8%
成果について保護者の評価を求めている	4.9%	3.8%	10.9%
その他	4.3%	2.2%	2.6%
キャリア教育は特に行っていない	15.6%	14.3%	10.3%

※下線は各ランクにおける上位3項目

この結果からは、上位・中位・下位校すべてに共通して、「(生徒に)意味を伝えること」「組織的な指導計画を作成すること」が優先事項として進められている一方で、ランク別に優先的な着手事項としての違いが見られる項目も存在した。上位校では、「学校全体の目標として育てる生徒像を設定」、中位校では「生徒の実態や要望の情報収集の実施」、下位校では、「学校全体の目標として育てる生徒像を設定」、「学校と地域や民間企業との連

携」である。この中で、「生徒の実態や要望の情報収集」については、中位校だけでなく、下位校においても、上位校に比して、高い実施率を示していることから、キャリア教育を推進するにあたり、目の前の生徒の抱える課題やニーズをより具体的にとらえていこうという取り組みが、中・下位校においてより進められていることが伺える。

IV-3. 推進事例に見られる、進路指導とキャリア教育の進め方との関係

ここまで、定量分析の結果を用い、高校の進学率別に実施されている進路指導活動の差異を確認し、キャリア教育の目的は、下位校において、より社会性の向上をねらいとされていること、進め方においては、すべてのランクにおいて「(生徒に)キャリア教育の意味を伝えること」「組織的な指導計画を作成すること」が優先されているものの、それ以外の項目においては、生徒課題やニーズに応じて推進における優先順位が異なる可能性を指摘してきた。

それでは、実際の場面において、各校ではどのような優先順位をつけながら、キャリア教育を展開しているのだろうか。そこには、進学率に応じた内容や展開方法の違いは見られるのだろうか。以下に上位校(A校)・中位校(B校)・下位校(C校)における、内容とその展開方法について、分析する。

①キャリア教育のねらい・目標

各校のキャリア教育の目標は以下図表5のとおりである。目標設定については、すべての学校で行われているものの、設定している内容は、生徒の変容に向けたものもあれば、キャリア教育の方法論を加えたものもあり、大きく異なっていることがわかる。

上位校では、「学習意欲の向上」「目的意識を持たせること」が挙げられ、中位校から下位校に進むにつれて、明文化された目標は、「職業観の育成」

や「進路意識の向上」といった、より抽象的なものになっていることがわかる。そこで、中位校と下位校については、学校長にキャリア教育の目的を直接問うた(図表5 コメント欄)。中位校では、「社会に貢献する人材に」下位校では、「意欲的な態度を身につけさせたい」といった目標があがった。このようにキャリア教育のねらいは各校で異なるようである。上位校と下位校においては、「意欲」が共通の目標としてあげられたが、上位校においては、より上位の学校への進学を目的とした、「学習意欲」の向上であり、下位校においては、やや無気力になりがちな生徒の意欲を引き出すことを目標としていることが明らかになった。

図表5 キャリア教育の目標

上位校	ねらい	生徒に「大きな夢と高い志」を持たせることで、自己の可能性に挑戦する気概と実践力を育てる 明確な目的意識を持たせることで学習意欲を向上させ、自発的に学ぶ力を育てる 「人を育てる」ことを明確に意識し、生徒・職員が目標に向かって一丸となって取り組む機会とする
中位校	重点目標	進路意識の高揚を図る 職業観の育成を図る 個別指導の充実を図る 体系的な進路指導をめざし、進路指導部の円滑な運営に努める
	(コメント)	・うちの学校は生徒の進路志望が多岐にわたっている。学力向上するように言われている学校。自分のやりたいことを達成させて、進学実績を後回しにするわけにもいかない。目標は、社会に貢献する人材を育てること
下位校	目標	みんながやるキャリア教育～すべての教育活動を通じて行うキャリア教育
	目的	企業・PTA・地域住民・教育機関等と連携した進路意識の向上や職業観の育成につながる3年間を通じたキャリア教育の推進
	(コメント)	生徒の特徴は、受身でおとなしい。自分から発問する部分が弱い。なんとかそれをもう少し意欲的な態度に変えていきたい

②キャリア教育の指導計画と既存の進路指導の関係

次に、指導計画および活動の内容についてであるが、指導計画については、ABCすべての高校において確認された。それでは、指導計画において、各校ではどのようなキャリア教育を実施しているのか。キャリア教育が展開される中で、高校のキャリア教育に関するカリキュラムがどのように再

編されているのかを見ていく。カリキュラムを見る理由は、キャリア教育が、既存の進路指導をもとにした、再編という形で実施されているのか、または、新たな活動として実施されているのかを見るためである。はじめにキャリア教育がどのように導入されているか、学校ごとに概観する。

図表 6 進学率別進路指導と追加された活動

		以前の進路指導	追加された活動
上位校	1年生	進路希望調査 進路指導ガイダンス 進路講演会 合格体験講和	スクールマナー集会 自校のキャリア教育についてのガイダンス 社会人講和 職業研究 学部学科研究 ライフプラン作成
	2年生	進路指導資料の説明会 大学研究 進路講和	インターンシップ(準備・実施) オープンキャンパス 小論文指導 大学からの出前講座 ライフプラン作成
	3年生	進路指導資料の説明会 進路講和 センター試験出願説明会 推薦入試出願説明会 進路希望調査 進路面談	自校のキャリア教育についてのガイダンス 小論文指導 オープンキャンパス
中位校	1年生	進路志望調査 進路講演会	キャリア教育についての講演 職業人講和 企業が求める人材についての講和 卒業生講和 大学模擬授業
	2年・3年	就職ガイダンス 大学訪問 就職面接練習 就職指導 推薦入試指導 公務員試験面接練習 出願指導 合格体験記の作成	職業人講和 インターンシップ・ボランティア 大学模擬授業
下位校	1年生	ガイダンス	キャリアアドバイザー講和 ビジネスマナー講習会 生き方・あり方に関する進路講演会 ライフプラン講習会 電話のかけ方に関する講習会 大学訪問 職場見学 キャリアアドバイザー面談 ライフプラン設計
	2年生	進路面談 ガイダンス	キャリアアドバイザー講和 卒業生との進路座談会 生き方・あり方に関する進路講演会 インターンシップマナー講座 インターンシップ 大学説明会 上級学校訪問 キャリアカウンセリング
	3年生		キャリアアドバイザー講和

図表 6 からは、上位校・中位校・下位校ともに総合的な学習の時間を使った新たな活動が豊富にもうけられていることがわかる。さらに既存の進路指導活動においては、直後の受験や就職に向かうためのマナーや面接指導、書類の作成方法といった進路決定に関するレクチャーが多く並んでいる。一方でキャリア教育を展開するにあたり、新

規に設けられた活動については、「生き方」「あり方」や「ライフプラン」「キャリアカウンセリング」といった活動名にもあらわれるように、直後の進路決定のみならずその先の進路を見据えた取り組みに着手しようとしているように見られる。

さらに、既存の活動の再編という視点から見ていくと、中位校においては、既存の進路指導をもとにキャリア教育を考えようという方針が打ち出されている。下位校においては、進路指導と生徒指導を再編する形で、進められようとしている。一方で、上位校については、既存の進路指導とは分離した形で、新規の活動としてキャリア教育を捉えていることがインタビュー結果から明らかになった。詳しくは後述するが、展開方法においても、上位校では、進路指導部とキャリア教育推進委員会とは別組織として運営されている。

さらに、この結果からは、進学率によらず、各校共通して生徒の「興味関心」の拡大が一つのキーワードになっていることが伺える。しかしながら、その目的は学校によって異なっている。上位校においては、自己の興味関心の領域を拡大し、その中から「やりたいこと」を目指すことが、さらなる学習意欲につながり、成績を後押しすると考えられているからであり、中位校では、学力の低い生徒であっても、社会に貢献する人材を育成するために、力をつけさせたい。そのためにどのような貢献をするのか、自分の「興味関心」について選択肢を拡大させる方法を用いて、考えさせたいとしている。下位校では、学習に限らず意欲的な態度を引き出すために、興味・関心の幅を広げることにより重きを置いたキャリア教育が展開されている。

③活動間の連続性

次に、これらの学校における、進路決定に至るまでの活動間の連続性をどのように担保しているかという点を見ていく。表 7 は、各校のキャリア教育担当教員を対象としたインタビューに基づき、連続性を担保するための取り組み状況をまとめた

ものである。

表7からは次の傾向が見て取れる。まず上位校は、1年と2年生の最後に実施する「ライフプラン作成」の時間を用い、1年間に実施した活動内容をまとめ、次の学年での活動とつなげようとしていることが窺える。一方、中位校では、自校で作成したワークシートをもとにした総学をすることで、ワークシートに流れを持たせ、活動間の連続性をはかろうとしている。そして下位校では、上位校と同様に毎年年末に実施される「ライフプラン作成」の時間から次年度の活動（例えばインターンシップ）への流れを作ろうとしていることが窺える。

図表7 活動間のつながり

活動間のつながり	
上位校	生徒には4月のガイダンスで活動のつながりを伝えた。しかし、一回だけのガイダンスでは難しいので活動のたびにSHRを使って、「今日は全体の中でのココの部分だよ」と伝えている 生徒に活動間のつながりを伝えるためには、教師も「何のためにやるのか」ということを理解していないと、わかっていないことが生徒に伝わってしまうと感じている 開始した初年度は教師がつながりを理解できなかったため、生徒にもつながりを伝えることができなかった。 活動のつながりは後で振り返ったときにやっと理解できた。 例えばライフプランは1年の秋に整理をはじめるが、生徒が自分のライフプランを作って、次のインターンシップに向かうとインターンシップの意味付けが変わる。ここは流れを持ってできているところ
中位校	いまは中学校でもキャリア教育をやっているから、1年の最初にアンケートを実施して、中学時代のキャリア教育でどんな活動をしたのか、1人1人の記録を残した ワークシートの中に、活動のねらいと内容を書いている。ワークシートに流れがあれば担任も流れを持って進めることができる 3年目になってはじめてキャリア教育の系統表ができ、生徒に配布することができた。ただしまだ点の状態では線の状態にはなっていないと感じている 理想は、将来像を描きながら、授業や行事がすべてつながっていくのだなと生徒がわかること。まだそうっていない
下位校	1年は自分の進路を設計するための知識を広げる、適性を見つける。2年はインターンシップ、3年は進路別に決める ライフプランを実施していないときは、「なんとなく」ということで終わっていた。最近は考えるようになった。ライフプランがあるからインターンシップも前もって準備して、「自分がやりたいこと」を明らかにしていくことができるようになった。1年からの実施でいきあたりばったりの活動にならないようになった ライフプランは1年・2年・3年で毎年見直す。ライフプランがあるから、そのためにインターンシップをするという位置付けになった 1年目はいま振り返ると思いつきの活動が多かった。いまは総学で各種行事を結び付けている

さらに、定量分析において、推進の上位にあがった「生徒にキャリア教育の意味を伝えること」については、3校に共通して、年度当初のガイダンスの時間を用いて行われている。しかし、各活動の目的やそれらがどのような流れを持った学習

となるのか、という点については、上位校のコメントにも見られるように、「教師がわかっていないと生徒に伝えられない」とあるように、年間を通じた実施をしてからではないと難しいといった指摘があがっている。

④評価の目的と方法

次に、これらの一連の活動を各校ではどのように評価し、成果を測定しているのか。以降に学校ごとに確認する。

上位校のキャリア教育の目的の1つは、生徒の主体的な学びを実現することである。そのため、学校の経営目標にあわせ、「学習」「進路」「生活」の3つの分野において、「生徒自身ができそうだと思う状態になったかどうか」を測定するため、各分野の自己効力感調査の項目を作成し、一年に1度、全校生徒への調査を実施、その結果を次年度のキャリア教育に反映している。一例を挙げると、「自分の苦手な学習分野を克服する」「自分の興味・関心を理解している」「ストレスに気づく・解消する」といった項目について、その自信の程度を測定するものである。この調査の結果から明らかになった、「生徒は主体的な行動に自信が持てる状態にはなっていない」という結果から、次年度には、授業改善に着手し、発表テーマの設定や発言機会の増加に取り組んでいる。

中位校のキャリア教育の目的の1つは、「社会に貢献する人材を育てる」ということであった。この学校では入学時点で、生徒の多様なニーズを把握するために、中学時代のキャリア教育において、どのような活動を通じ、何を学んできたのかといった調査を実施しているのが特徴的である。さらに各活動終了後のアンケートの実施をあわせておこなった。入学時調査は、生徒による4段階（よくできる・まあまあできる・あまりできない・全然できない）の自己評価によって実施された。その結果、特に高い評価結果であったのは、「仕事をするための厳しさや大変さを感じる事ができる」であり、特に以下の4つの指標において、自

己評価が低いことが明らかになった。「自分の良さを見つけることができる」「自分で目標を立て、それを目指して積極的に取り組むことができる」「自分から進んでやるべきことに取り組むことができる」「たくさんの人に話しかけたり、ものをたずねたりすることができる」である。これらの結果は、日常的に教師が感じている生徒の無気力さにも通ずるものであり、こうした生徒の状況に対し、各教科・小論文指導・図書情報部との連携を通じて、「刺激する力（身につける力・大切さに気づかせることができた力）」といった項目を加えたシラバスの作成を行った。年度評価については、生徒のフリーコメントの記述を実施しており、当初の目標に対する評価結果は明らかになっていない。

下位校のキャリア教育の目的の1つは、「意欲的な態度への変容」である。生徒が「意欲的な態度に変容したかどうか」について直接測定をしているものではなく、各活動結果について、「意欲的に取り組んだかどうか」を直接生徒に自己評価させている。調査項目の一例を挙げると、「なぜこの教科・科目を学ぶのか、理解していますか」「今日の授業の内容は理解できましたか」「今日の授業に興味を持ちましたか」「今日の授業の内容は、あなたの将来に何らかの形で生かせる内容だと思いませんか」といった内容で生徒に4段階で自己評価をさせている。下位校においてさらに特徴的なのは、生徒のみならず、公開授業実施後の参加者からの評価、教職員からの評価、PTAからの評価といった複眼的な視点で生徒を捉え、評価を実施している点であろう。いずれも評価項目については、生徒の意欲的な態度を確認する項目が含まれており、本校において目的としている、キャリア教育の目的が、評価項目と密接に関連していることがわかる結果となった。

⑤推進組織と実施に関与する教員集団

次に、ここまでに確認してきたキャリア教育の内容がどのような組織体制によって展開されているのかを確認する。図表8は各校のキャリア教育

推進委員会の構成員の分掌である。

図表8 推進委員会の構成員の分掌

上位校	教頭、進路指導主事、研修主任、教務主任、総務主任、各学年主任
中位校	教頭、進路指導主事、研修主任、教務主任、総務副主任、各学年主任、キャリアアドバイザー
下位校	キャリア教育専任、総務主任、教務主任、進路指導主事、生徒指導主事、研修、各学年主任

各校共通しているのは、ともに教務主任・学年主任が含まれている点である。一方で進学率による差異が見られたのは、先にも触れたように、上位校では、進路指導部とキャリア教育推進委員会は別組織で運営されている点である。中位校においては、県から派遣されたキャリアアドバイザーが一員となっている点に特徴がある。

では、これらのメンバーが中心となって企画されたキャリア教育はどのように他の教員に伝達され、実施されているのか。図表9は推進委員からの伝達方法を学校ごとに確認したものである。

図表9 推進委員からの伝達方法

上位校	推進委員会で事前に計画されたものを学年部会に。初年度は具体的な計画になっておらず、「何のために」「どのように」という点が担任に共有できないことで混乱があった 担任までおろした後で、担任にも意見を聞いて双方でやりとりすることが鍵。そうしないと毎回やらされ感が残り、「やらされ感」だけがどんどん積みあがっていくことがわかった 理想としてはワークシートを年間で作っておくこと。ただし、あまり作りこみすぎて学年のカラーが出てこない。一方で学年から出てくるのを待つと「指示がない」という不満があがるので、バランスが大切 キャリア教育は、担任に授業の目的とやり方を伝える必要がある。それが難しい。 大きなところだけ企画したら後は学年部に運営を任ずるやり方ではないと、続けていくことは難しい
中位校	推進委員会に学年主任が入っているのをそれを学年部におろす。 ワークシートに目的が書いてあるので、学年部からそのままワークシートを使って実施してもらう ねらいに到達できない子がいたときは面談に使うって欲しいといっているが、まだすべてで実施できているわけではない
下位校	推進委員会の中に学年主任が入っているし、生徒の人数も少ないので、何をやっているか、他の学年にもすぐにわかる キャリア教育の視点を生かした取り組みとして、授業改善・進路指導・生徒指導・特別活動・職員研修とのつながりを示した。

下位校は特に学校規模が小さいため、単純な比

較はできないが、上位校・中位校については、委員会で決定された内容は学年部を通じ、担任に共有されている。他の新規活動と同様、この流れは大きく変わることはないと考えられる。この点においては、生徒の課題やニーズに応じてということではなく、学校規模に応じた伝達方法があることが見える。

キャリア教育を他の活動と接続していくためには、担任による実施が不可欠であることは上位校のインタビュー結果にも見られるところである。規模の小さい下位校を除いては、活動のねらいと内容について担任に伝達し、当初の目的どおりに実施を促すことの困難さがあげられている。この点については、3校ともに職員室でのインフォーマルコミュニケーションに頼っているところが大きく、調査の結果からは、有用な示唆を取り出すことはできなかった。

⑥キャリア教育の内容・展開方法についての小括

以上、3校における進路形成の内容面の見直しは次のようにまとめられる。キャリア教育の目標については、上位校・中位校・下位校で、それぞれに生徒の実態に即した目標が設定されていた。このうち、上位校と下位校については、「意欲」が共通したキーワードとして挙げられていたが、その内容は、「目的意識を持たせることによるより高いレベルの学校への進学」「無気力になりがちな生徒に意欲を持たせたい」といった異なる内容が確認された。

次に既存の進路指導との関係では、上位校では、「興味関心」を中心に据えたキャリア教育と進学先決定のための進路指導とは、分離する傾向にあり、中位校では、生徒のニーズを把握することに注力した上で、既存の進路指導の改善と授業内容の改善を主眼においた内容で推進しようとしている。下位校においては、進路指導だけでなく、生徒指導とも融合したキャリア教育の内容で実施が進んでいる。

キャリア教育目標と評価の関連については、各

校ともに目指す生徒像を設定し、それを評価指標の一部としていることが明らかになった。上位校・中位校では、生徒の自己評価が行われ、下位校においては、生徒のみならず、教職員ほか複眼的な視点で生徒の変容を捉えようとする姿が窺える。さらに、特に多様な課題やニーズを持った生徒が集まる中位校においては、入学段階における生徒の発達段階について調査を実施することを通して明らかにしようとしている。

そして、活動間の関係性を作ることに限らず、上位校と下位校において、各活動を統合させる「ライフプランの授業」が実施されている他には、3校の違いは確認することができず、各校ともに、活動の連続性については、方法論を模索している段階であることが窺えた。そして、設定した目標と評価の関係であるが、各校ともに年度評価、活動後評価を実施していた。ただし、活動後評価については、生徒の感想を自由記述で書かせるものが多く、評価結果の分析や次の活動への反映や見直しなどにはまだ活かされていない状態であることがわかった。

最後に、展開していくにあたっての、推進委員会の構成員の分掌と委員会から各教員への内容の伝達方法についてであるが、構成員の分掌については、教務主任や学年主任の参加を前提としながらも、進路指導や生徒指導との内容面での関係性が、構成員の選定に影響していることが示唆される結果となった。また、企画された内容の伝達方法については、委員会に参加している学年主任から学年部におろし、それを担任が実践するという基本的な流れの他には、学校規模による影響を排除できず、進学率による違いについての知見を取り出すことはできていない。

V. 考察

本稿は、高校の個性化・多様化政策が進行する中、平成21年度より改定がはじまる高等学校におけるキャリア教育が、生徒のニーズや課題に応じてどのように展開されていく可能性があるのか

を実証的に検証してきた。最後に、本調査から示唆される点を整理し、実践的な課題の視点からいくつかの論考を加えておきたい。

第1の課題は、進路指導活動が中位・下位校において、より多様化が進んでいるという先行研究に基づいた知見をもとに、キャリア教育のねらい・内容は、進学率つまり、生徒の課題やニーズに応じて異なっているのかどうか、検討することであった。

キャリア教育のねらいについて、項目間で比較した場合、上位校・中位校・下位校に共通して一番高く考えられているキャリア教育の目的は、「将来のなりたい姿・希望する生き方を描かせる教育」であった。その中でも特に、下位校については、上位校・中位校に比して、「社会性（規範意識、思いやり、マナーなど）を身につける教育」を目的としている傾向が窺えた。さらに定性分析において、進学率別の差異を確認したところ、学校ごとにキャリア教育のねらいは異なり、上位校と下位校の目標において、背景となる目的は異なるものの「意欲」が共通したキーワードとして挙げられた。内容面では、進学率によらず、「興味」「関心」の拡大を中核とした活動に着手されていた。

第2の課題は、キャリア教育の展開方法は、生徒の課題やニーズによって異なる動きを見せているのかということ进行を明らかにすることであった。

定量分析の結果、上位・中位・下位校すべてに共通して、「(生徒に) 意味を伝えること」「組織的な指導計画を作成すること」が優先事項として進められている一方で、進学率別に優先的な着手事項としての違いが見られる項目も存在した。上位校では、「学校全体の目標として育てる生徒像を設定」、中位校では「生徒の実態や要望の情報収集の実施」、下位校では、「学校全体の目標として育てる生徒像を設定」、「学校と地域や民間企業との連携」である。

さらに、定性分析の結果からは、上位校では、「興味・関心」と「進路決定」が分離した状態で実施されており、下位校では、「興味・関心」と既存の進路指導・生徒指導とを融合させる方法で展

開が進んでいることが確認された。そして、中位校では、定量分析の結果を裏付けるように、多様な生徒の受け入れに備え、入学段階における生徒の課題・ニーズの把握に注力している。また、下位校においても、定量分析の結果から見えた、「学校と地域や民間企業との連携」を通じ、学校外の関係者の視点から生徒の変容を捉えようとする取り組みがはじめられていた。

そして、キャリア教育のねらいと評価の関係においては、各校ともにつながりを持って実践されていることが窺えた。特に、中位校・下位校においては、目の前の生徒がどのような課題やニーズを抱えているのかを把握することに注力した調査およびその変容を測定するための評価が実施されている。

次いで、これらの結果から、高校においてキャリア教育を推進していく際の実践的な課題の視点から論考を進める。

第1に各校におけるキャリア教育の展開についてであるが、各校独自の「生徒の実態」にあわせた展開策が求められるところである。本稿の分析結果を考慮すると、キャリア教育への展開は、上位校においては、アカデミックな教育において「興味・関心」の要素を付加することによる学習意欲の向上に向けた変革の可能性が考えられる。また、中位校においては、入学段階での生徒の多様な課題・ニーズの把握に、より注力することが考えられる。さらに下位校においては、「興味・関心」だけではなく、「社会性の醸成」を目的として、キャリア教育を既存の生徒指導と融合しながら進めていく可能性が窺える。

こうした学校独自の展開策の検討にあたっては、社会への移行を前提とした生徒課題の把握と校内での共有がその前提となるだろう。つまり、各校において、社会への移行に際し、生徒をどのように育てていく必要があるのかという生徒像を明確にし、さらに現状の生徒の実態を把握した上で、生徒像と現状の生徒の実態とのギャップがどこにあるのか、ギャップ解消のための適切な手段は何かを検討することが必要であろう。この際、生徒

の課題は変化するので、変容する生徒課題にあわせた手段の見直しを柔軟におこなうこともあわせて視野にいれておきたい。

第2に、適切な手段・活動の検討においては、既存の進路指導も含めて、その手段・活動が何をねらいとしたものなのかを改めて明確にすること、さらに、各活動が生徒の中で統合され、一連のつながりを持ったものとして認識されるための統合的な活動を意図的に導入することが求められる。学年間・活動間の連続性については、事例の3校に見てきたように、上位校・下位校においては、「興味・関心」の拡大を自己の進路と統合させる活動を取り入れている。しかし、中位校に見られたように、この統合活動が存在しない場合には、荒川の指摘する「興味・関心のままに学習させる」状態が継続する危険性を含んでいると言えよう。

第3に、各校においてキャリア教育を展開していく際の行政の支援策について論じておく。

これまでの各種の教育施策は、学校に対して一様な理解を迫るものであった。しかし、80年代の学習指導要領の改訂とそれに伴う、教育課程行政の裁量拡大以降、自校の生徒にあわせた学校経営のあり方が問われてきている。本稿で明らかにした、キャリア教育の「ねらい」における各校の多様な理解は、まさに目の前の生徒の実情にあわせた学校改革推進の核となる可能性を示唆するものである。

しかしながら、本稿の調査結果を見る限り、評価を実施している学校は、上位校 8.3%、中位校 8.8%、下位校 12.8%に留まっている。カリキュラムにおいても、キャリア教育の方法論は、「興味・関心」を拡大させることに注力しているように見える。しかも、その手段においては、上位校・中位校に見られる「社会人講師の講和」のように、いまの段階では多様な手段が用いられているとはいえない。ここからは、キャリア教育の展開に際し、方法論が見えずとまどっている学校の姿が窺える。

こうした学校の状況を勘案すると、行政策においても、大きな変革が求められていると言えよう。

つまり、これまでのような一様な理解を促す支援策から、各校が独自に全体計画を検討し得る支援策へと転換する必要がある。行政の学校支援策としては、これまでおこなってきたような「活動事例」とどまるものではなく、いかにして各校が独自の生徒の目指す姿を言語化するのか、現状を把握するのか、どのように評価するのかといった、全体計画の立案に向かうための方法論を各校が共有できる仕組みをつくる必要がある。

最後に、本研究から次の研究へとつなげていくための研究上の課題を整理しておく。

本稿では、各高校のキャリア教育の展開方法について、初期段階におけるその着手の実態を明らかにすることを試みたが、「進路ガイダンス」といっても、実態を見ると将来の展望について考えさせている内容もあれば、既存の進路指導の流れを受けて、受験教育にシフトした内容になっているケースもある。今後、キャリア教育への展開の実態を解明するためには、各活動が実際にはどのようなねらいを持って実施され、活動の成果はそのねらいを果たすものであったかどうかを踏み込んで分析する必要がある。

これは、既存の進路指導についても言えることで、これまでの進路指導活動の中で実施されてきたどの要素が各校のキャリア教育に寄与しているのかという点については、活動の成果である進路形成プロセスにおける生徒の変容とともに確認しておく必要があるだろう。

さらに、本稿で展開の実態として取り上げたのは、キャリア教育の推進指定を受けた3校の事例に過ぎない。学校ごとの展開手法の一般化については、今後、義務化されたキャリア教育の推進状況を見守る必要がある。これらについては稿をあらため、探求を続けたい。

参考文献

- 荒牧草平, 2003, 「現代都市高校におけるカリキュラム・トラッキング」『教育社会学研究』73:25-42
 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学』東信堂。
 菊地栄治, 1986, 「中等教育における『トラッキング』と生徒の分

- 化過程—理論的検討と事例研究の展開—『教育社会学研究』
41,136-150
- 耳塚寛明, 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』
35,111-122
- , 1993, 「学校社会学研究の展開」『教育社会学研究』51,115-136
- , 1996, 「高校教育改革と教育構造」耳塚寛明・樋田大二郎編
著『多様化と個性化の潮流を探る—高校教育改革の比較教育社
会学』学事出版, 88-102
- 金子照基, 2008, 「高校教育の多様化と改善」『教育改革の課題と基
本構想—第四の教育改革をめざして—』風間書房,82-85
- 文部科学省,2009,中央教育審議会審議経過報告
- 耳塚寛明, 1981, 「高等学校における学習活動の組織と生徒の進路
意識」『東京大学教育学部紀要』21:29-52